

第20回

第3章 国際社会に生きる日本人の自覚

日本人の美意識

今回学ぶこと

日本人は、はかないものに美を感じてきた。仏教の無常観も、無常だからこそ美しいという積極的な世界観として受け止めた。そうした考え方から生まれた「あはれ」「幽玄」「わび」「さび」といった日本人の美意識について学ぶ。また「いさぎよさ」に美しさを求めた武士道についても考える。



講師
田中久文

今回のキーワード！

無常観／あはれ／幽玄／わび／さび／武士道

無常の美と「あはれ」

日本人が仏教から受けた影響でもっとも大きなものの1つに無常観がある。無常観とは、この世のものはすべて変化し消滅していくものだという教えである。

元来、仏教ではそうした無常観こそが人間に苦しみをもたらすと説いていた。しかし日本人は、この世は無常であるからこそ、一瞬一瞬が貴重であり、味わい深いのだと肯定的に理解した。こうした考え方は、変化するもののうちに美を見いだそうとする発想となって日本のさまざまな芸術や芸能の底を流れる美意識を形成した。

その代表的なものが「あはれ」という美意識である。「あはれ」とは、自然や人間の無常を知り、思わずでるため息に由来するといわれているが、そこにこそまた深い慰めがあるのだとされた。

「幽玄」と「わび」「さび」

無常に美を見いだそうとする考え方は、やがて自然が現れている表面の姿ではなく、背後の奥深いところに美を求めようとする美意識を生み出した。

その代表的なものが、中世の和歌や能楽などにみられる「幽玄」である。「幽玄」は、満開の桜や華やかな紅葉がむしろ雲や雨にさえぎられ、それらを直接見るのではなく想像している方が、より美しさを味わうことができるのだとする美意識である。

また、簡素な自然の姿や年老いた人間など、普通には消極的なイメージをもちがちな「わびしいもの」「さびしいもの」に対して、逆に味わい深い美しさを見いだそうとする美意識も生まれた。千利休の茶の湯で説く「わび」や芭蕉の説く「さび」などがそれである。

このように、マイナスと思われるものに、プラスの価値を見いだそうところに日本人の美意識の特徴の1つがあるといえよう。

武士の生き方

無常観は武士道の成立にも大きな影響を与えた。

戦乱のなかで常に命の危険にさらされていた武士は、この世の無常を切実に感じていたに違いない。そうした武士には、日頃から死の覚悟というものが求められた。

しかし、武士にとって主君との主従関係や自分の勇敢さに対する世間の評価は永遠のものであった。したがって、武士は「名と恥」（名誉心と恥の意識）を何よりも重んじた。

また武士には、自分の命に執着しない「いさぎよさ」が求められた。そこには心の清らかさを尊重する「清き明き心」の伝統や、無常なものに美しさを感じる美意識の伝統が生きているといつてよい。

Tanakaコラム

ネガティブを 受け入れる日本人

日本人は、人々が否定しがちな、「はかないもの」「わびしいもの」「さびしいもの」に逆に美しさを見いだしてきました。それは、弱さや貧しさや孤独といったネガティブなものを、積極的に受け入れようとする私たちの先達の知恵だったといえるでしょう。

現代の私たちにも勇気を与えてくれる考え方ではないでしょうか。